
生徒会の切札

1-1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会の切札

【Nコード】

N7443Z

【作者名】

1 - 1

【あらすじ】

碧陽学園生徒会…そこは、4人の美少女と1人の美男子(?)がいる。

その中に追加メンバーとして足を踏み入れた2人目の男は文武両道の天才(天災?)でゲーム名人!?

そんなオドリ主・豹堂真ヒナチの織り成すドタバタ劇!

これが処女作なため、誤字・脱字があるかと思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

存在しえないプロローグ（前書き）

とある作者様に感化されて書いてみました。

今回はプロローグのみです。

これからよろしくお願いいたします。

それでは「生徒会の切札」始めていききたいと思えます。

存在しえないプロローグ

- ルール1 神の存在を受け入れる
- ルール2 彼らに直接接触してはいけない
- ルール3 友達の友達是我ら。それが干渉限界。
- ルール4 企業の意向は何よりも優先される
- ルール5 スタッフは、個人の思想を持ち込むなかれ
- ルール6 情報の漏洩は最大にして最悪の禁忌である
- ルール7 我らが騙すのはヒトではなく神であることを忘れてはならない
- ルール8 このプロジェクトに道徳心は必要ない。全ては企業の利益のために
- ルール9 性質上、学園の保守は最大の命題である

追加ルール 今年の生徒会には気をつける

存在しえないプロローグ（後書き）

うーん：プロローグだけでよかったのだろうか…

？「まあいいんじゃないやね？原作もこんな感じで始まるわけだし。」

そうだよな…ってあんた誰！？

？「あ？俺は…てちよつとまって！何で名前伏字なんだよ！あらずじで名前出てるから出したっていいだろ！？」

えー まだ本編入ってないしー

？「こいつ…」

まあ次回には名前出るかな？次回設定か本編をやるし

？「まあ、それならいいか…」

てなわけですまた次回お会いしましょう それではー

駄弁る生徒会？（前書き）

遅くなりました

このような小説に3件ものお気に入り登録があったこと感謝いたします

それでは生徒会の切札「駄弁る生徒会」始めていききたいと思えます

駄弁る生徒会？

「世の中がつまらないんじゃないの。貴方がつまらない人間になったのよっ！」

まどろみの中にあつた俺の意識が、会長のどこかの本の受け売りの様な言葉によつてもどつてくる。

折角気持ちよく寝ていたのに…。でも会長にしてはいい事をいったと働かない頭を使いながら思う。

初めて経験したことも、何度もやっているうちに馴れて新鮮な気持ちを感じなくなるからな。

初めての一本背負い。

初めての面打ち。

初めての瓦割り10枚。

初めての…。って、ここまで武術関連ばかりじゃないか？

あ 自己紹介が遅れたな。

俺の名前は豹堂真とらたけまこと。この碧陽学園生徒会の会長補佐の役職についている。

ちなみにこの物語の語り部で、主人公でもある…。急に俺は何を言い始めたんだ？主人公とかつてなんだ？…。まあいいか。

さて、そろそろ鍵がへんな事を言つて、会長を慌てさせるころかな？

「じゃ、童貞も悪くないってことですか？」

「「ぶっ！」」「…こいつは…。俺の予想をはるかに超えたこと言いやがった…。」

おそろくうちのお子様会長は涙目で杉崎を睨んでいるだろう。何で分かるのかって？経験則だよ うん

「今の私の言葉から、どうしてそんな返しが来るわけ？」

「甘いですね会長。俺の思考回路は基本、まずはそっち方向に直結します！」

「なにを誇らしげに！杉崎はもうちょっと副会長としての自覚をねえ……」

「ありますよ、自覚。この生徒会は俺のハーレムだという自覚なら十分」

「ごめん。副会長の自覚はいいから、そっちの自覚を捨てることから始めようね」

相変わらずだなあこの二人はと思いながら二人を眺める…おっとこの二人の紹介もしないとな。

一人はこの生徒会の会長・桜野さくらのくりむだ。

どこからどう見ても小学生としか思えない容姿・頭脳のスーパーお子様。

よく高校3年まで進学できたものだ　ほんとに

もう一人はこの生徒会の数少ない男子の片割れの杉崎すぎさき鍵。

見た目はかっこいいのに、常日頃からハーレム　ハーレム言っているせいかそこまでもてない二枚目半な男。

まあそれは理由があるからなんだがな　ちなみに俺の親友でもある

「あれ？真起きてたのか？てつきり当分起きることないと思ったんだけど」

「おっす　おはよう　相変わらずだなお前は…会長を口説くんなら後にしてくれ　あとに」

「く　口説くんじゃないわよ！まったく…」

そっついながら会長はさきほど吹きだしたお茶を、ティッシュで吹

いてそのティッシュを丸めてゴミ箱に投げようとする
てか片目を閉じてまじに狙ってるよこの人…ほんとに子供だなあ…
そう思いながら俺は鞆からP Pを取り出す
今日は何しようかなあ…モン ンでもいいしファンタシー ターで
もいいし…

「かいちよー」

「なによあ」

「好きです。付き合ってください」

「にやわ！」

そんな会長に対して鍵が唐突に告白してティッシュが俺の目の前に
飛んでくる まあどうでもいいや

よし 今日はパワ ロでオールポジション作るまで粘るか とりあ
えず最初はキャッチから…

「なんで杉崎はそんな軽薄に告白できるのよ！」

「本気だからです！」

「嘘だ！」

「『ひ らし』ネタは古いですよ会長…」

「大体杉崎にどこに本気があるのよ…生徒会に初めて顔出した時
のせりふ 覚えてる？」

「えつと…なんでしたっけ？『俺にかまわず先に行け！』でしたっ
け？」

「ちなみに俺は『ナズエミデルンデイス（OWO#）』でしたね
確か」

「しよっぱなからどんな状況よ！それと豹堂！仮面 イダーは電
しか見てないわ！」

まじかよ ブ イドもいい作品だと思っただけどなあ…ネタ抜きで
てか会長も仮面 イダー見てたんだな

「あれ？違いますか？じゃあ…」ただの人間には興味ありません
宇宙人 未来人 「」

「危険よ杉崎！いろんな意味で」

「大丈夫です。原作派ですから」

「何の保障！？あとアニメの出来は神だよ！？」

「…二期はどうして作画がけい ん！つぼかつたのか…」

「やめなさい！そこには触れちゃいけないわ！」

ゲームの画面に集中しつつ鍵に便乗して会長を弄る

お！天才きたこれいいとこまでいけるんじゃないかね？！

「皆好きです。超好きです。皆付き合って。絶対に幸せにしてみせるから。」

鍵がこの生徒会に顔を出した時のせりふを言う まあ俺そんな時いな
かったけどね

「そうよそれ！まったく…誰でもいいから付き合ってなんて誠実じゃないわ！」

よく言うよ…鍵がそんなせりふを言ったのも こういう考え方を
するようになったのも会長のせい というより会長のおかげなのに

「一途なんです！美少女に！」

「括りが大きいわ！」

「希少種ですよー美少女。それによくありませんか？最初から「俺は
！ハーレムエンドを目指す！」って宣言するの」

「あなたはそこらのギャルゲ主人公とは基本スペックが違いすぎる
わ」

「確かに…鍵は主人公の友人のギャグ要員って方が似合ってるかも
な。まあ俺もだろっけど」

「おい真！お前はなんでちよくちよくしか喋らないの！？そして俺

の親友だよな?!なんでそんな俺に厳しいんだよ!」
「厳しい?俺はただ単に事実を述べただけだけ?」
「そ・そうよ!豹堂の言うとおりよ!」

鍵が「顔はいいのにー!」とか言っているが無視無視
若干涙目になりながら鍵は俺の前にあつた会長の捨てそこなつたテ
イツシュをゴミ箱に投げ入れる

「杉崎つてさ さりげないところで優しいわよね…無意識に」
「え?…こういうギャップって好感度上がるでしょ?」
「狙い!?しまった!あたしの中の杉崎への好感度は若干上昇して
しまったわ!?!」

この二人はほんとに仲いいなあ こんなに騒いで…つて!

「うああああああああああ 炎上したあああああああああ
あ」

「急にどうした!?!」

うう…畜生…またこいつ炎上しやがったよ…やべ まじで涙出てき
た…

そんなこと思いながらゲームを終了して別のゲームに入れ替えてい
ると生徒会室の扉が開いた

「キー君 アカちゃんをいじめないの そしてニユー君…大丈夫?
廊下中に声が響いてたけど…」

この人は紅葉千弦さん 俺の先輩でおこさま会長とは違い出るとこ
は出てる綺麗な先輩だ

クールビューティーという言葉があう人だ ほんとこの二人が親友

って信じられないな…

ちなみにニュー君って言うのは俺のあだ名だ

真 しん new ニュー

ってな感じのあだ名 まあ個人的にも気に入っている

「やだなあ千弦さん 弄ってるんじゃないかって辱めてるんです」

「心配しないでください千弦先輩…これから別の世界に行くんで」

「余計に悪質よ？それ あとニュー君現実逃避はいいから なんか厨二臭いわ」

グフツ！…じ 実際逃げてる上に俺の趣味的にあってるから反論が出来ない…

「大丈夫です同意の下ですから てか今日集まり悪いですね俺のハレム」

「ハレムじゃなくて生徒会ね それにキー君のそういうところ直せないのかしら？」

「ぐ…でもこれが俺ですから！ これが俺のすべてですから」

「つまりお前はその程度の男ってことだな」
あ また鍵が涙目になった 相変わらずこいつ弄りやすいな（S
つけ全開）

「まあ 私はキー君のそういうところ 嫌いじゃないけど…少しは改善するべきじゃないのかしら？」

「く で でもこういう人こそ落ちたら激しいにちがいな」

「あ それは正解 私小学校のころに好きな人に1日300通送ったりして最終的に精神崩壊まで追い込んだりしたし…あなたはどうかしら」

ガクガクブルブル そのことを聞いた俺たち三人全員青ざめた顔で千弦先輩を見る…

そんな中鍵が口を開いた

「分かりました…」

「あら それを聞いても私を受け入れてくれるの？ いま私の好感度がぐんと」「千弦さんとは 体だけの関係を目指します！」「…」

ハア…鍵のアホ…そういうのがあるから三枚目って言われるんだよ」

「お前は今日絶好調ですね！」

あれ？俺声に出してないよね？ あれ？

「声におもいつきし出てましたからね！？なにその「え！？」って顔！」

今日の鍵は精神的にズタボロだな 主におれのせいで

そんな鍵とのやり取りをしているうちに会長がどこからかお菓子を
出して食べようとしていた

「「太りますよ」「 おっと鍵と被った まあ誰しもが思う事だも
んな

「ふ 太らないよ 私太りにくい体質だし」

そう言いながら会長はお菓子を口の中に放り込む

その刹那 千弦先輩と俺はアイコンタクトを交わす

「えっとこの問題は…『メタボリックシンドローム』ね よし正解
つと」

「近年多いですよね メタボな人って この年でメタボって人もち
よくちよくいますからね」

「…」

この会話を聞いた会長が涙目の状態で椅子から崩れ落ちる…その間

に千鶴さんとほくそ笑む

そのとき鍵がこっちを見て青ざめてたように見えるけど 気のせい
だろう

そして鍵が会長に近づいていく

「会長 心配しないでくださいもし太つたら…」

「え す 杉崎 太つて醜くなった私も好きでいてくれるの？」

「その時は…仕事に生きればいい」「リアルアドバイス?!」

「俺 陰ながら応援しますから！ ブログに匿名で励ましのメール
送りますから」

「陰からなんだ！ 匿名なんだ！ 太つたら見捨てるんだ！」

「だから太っちゃ駄目ですよ 太っちゃ」

鍵が笑いかけながら会長にそういうが お前さらつと酷いこと言っ
たよな

まあ それが杉崎鍵つて人間なのだろうけどさ

そうこうしているうちにまた生徒会室の扉が開いて残り二人のメン
バーが入ってきた

駄弁る生徒会？（後書き）

どうだ！？

真「長いし読みづらい 出直せ」

グサツ（胸にルガーランスが刺さる）

真「てか 今回で深夏と真冬はでてこないのな」

まあ 自分の執筆が遅いせいで話の進行も遅く…

真「お前のせいだな つまりは んで？ 次回の投稿予定は？」

うーん…年末だから実家にも行かないといけないし それに大掃除

も…

真「まあ こんな駄作者だが気長に待っていてください」

ほんとに申し訳ない それでは次回の駄弁る生徒会？でお会いしま

しょう

それではー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443z/>

生徒会の切札

2011年12月28日00時50分発行